限られた人々だけの議論で満足しないために

哲学する場を「セーファー」にする

坂本　美理
竹内　彩也花
浅葱

1. ワークショップの概要

本稿は 2024 年度哲学若手研究者フォーラムにて行われたワークショップ「限られた人々だけの議論で満足しないために: 哲学する場を「セーファー」にする」の報告書である。このワークショップは自助グループ「WOMEN: WOVEN（ウィメン・ウォーヴェン）」のオーガナイザーを務める坂本美理・竹内彩也花・浅葱によって開かれた。本稿ではまず WOMEN: WOVEN の紹介を行い、ワークショップの開催経緯と趣旨を説明する。次に、ワークショップ内で行われた 3 つの発表の内容を詳述する。最後に、グループディスカッションで話されたことについてまとめ、ワークショップの総括を述べる。

WOMEN: WOVEN とは、それぞれの人生において哲学の営みに繋がり続けようとする「女性」のための自助グループである。2020 年に行われた前身となるオンラインイベント「女子学生のためのウィンタースクール」を経て 2021 年に発足した。発足当初は、大学院進学を志す学部生や、女性ならではの困難を抱えて孤立しがちな初期キャリア研究者を対象としていたが、現在では、アカデミズムとどのような距離をとるかにかかわらず、何らかの仕方で哲学を学んだり研究したりしようとする女性のためのセーファースペースとなることを目指して活動している。この目的のために「「女性」であること」という参加資格を設けているが、「女性」の基準は問うておらず、「女性」には、性自認、出生時に割り当てられた性別、多くの場合に他人から眼差される性別などと、何らかの仕方で「女性」の経験を持つ人が含まれ、いずれであっても構わない、としている。オンラインで活動をしており、これまでにイベントや読書会、クローズドなネットワーキングの場の運営、女性の大学院生や研究者をめぐる状況についての発信などを行ってきた。活動資金はクラウドファンディングによって獲得している。

上述のように、WOMEN: WOVEN はオンライン上で活動しており参加資格を設けているクローズドな集まりであり、外部の人々に活動の実態を知ってもらう機会はあまりない。しかし、WOMEN: WOVEN が哲学する「女性」のためのセーファースペースを目指すのは、現状の哲学をする場が「女性」（そしてその他さまざまなマイノリティ）にとって安全ではないと考えているからであり、その問題は「女性」（マイノリティ当事者）だけの問題ではなく、哲学をす

る場にかかわるすべての人々の問題である。したがって、WOMEN: WOVEN 外の人々とも問題意識を共有する場を持ちたいとオーガナイザーたちは考えており、若手哲学研究者フォーラムでセーファースペースにかんするワークショップを行うことを企画した[1]。

ワークショップは「限られた人々だけの議論で満足しないために: 哲学する場を「セーファー」にする」と題され、哲学する場をより多くの人々にとってより安全な場にするための提題と意見交換が行われた。

2. 坂本報告「WOMEN: WOVEN の取り組み：セーファースペースのために」

坂本報告は、「セーファースペース」の定義や性質について述べたのちに、WOMEN: WOVEN が行っている具体的な取り組みについて説明した。

まず、セーファースペースの定義を二つ紹介した。「差別や抑圧、あるいはハラスメントや暴力といった問題を、可能な限り最小化するためのアイディアの一つで、「より安全な空間」を作る試み」のこと、そして「可能なかぎり、だれもがアクセスしやすい場のこと。だれもが他者化されたり威圧されたりするような目にあうことなく敬意あるやりかたで意見交換できるようになっており、それゆえ自分が周縁化されたグループに属していることが理由でセーフだとか歓迎されているだとかがあまり感じられない、ということがない場」である[2]。これらの定義はセーファースペースが「場」であり「試み」であることを指していて、「セーフ」ではなく「セーファー」という語からもわかるように、それが終わりのない試み、理想の場であることが確認できる。

次に、セーファースペースが持つ二面性について述べた。セーファースペースは、一方で差別や抑圧、侮辱や暴力から解放される場であり、他方で自由に話すことができる場でもある。この 2 点には緊張関係があり、バランスがとられるべきものである。これについてここで深掘りすることはできないが、それは、そこにいる人と場そのものの変容の可能性をどのくらい保つことができるかにかかっているのではないかと WOMEN: WOVEN のオーガナイザーたちは考えている。「女性」という名のもとに集まりつつ、「多様」な人がいることを前提にし、限界や制約を忘れず、広がっていける場所を目指しているのである。ここでは、セーファースペースの複数性や多様性も重要になるだろう。

---

1 WOMEN: WOVEN のオーガナイザーたちが学会でワークショップを行うのはこれで二度目である。先代のオーガナイザーたちによって 2022 年度の応用哲学会大会においてワークショップ「どうして女性が「女性」問題を被るのだろうか: 哲学におけるセーフ・プレイスの形成を目指して」が開催された。

2 堅田香緒里 (2021)『生きるためのフェミニズム: パンとバラと反資本主義』タバブックス.、Klieber. A. and Vince. R. (2021). Safer Spaces: Why, What and How. On the Blog of Minorities and Philosophy (MAP) UK. より（小川泰治ら訳）。ただし、元サイトは現在閲覧できなくなっている可能性が高いため、邦訳のアドレスのみ参考文献表に示した。

次に、以下では WOMEN: WOVEN がセーファースペースづくりのために行っていることを紹介する。第一に、参加資格と、言動についてのルール、グラウンドルール規定を行っている。参加資格については上述のように、「「女性」、ただし基準は問わない」というかたちで設定しており、シス男性は参加できないことが決められている。参加資格の限定は、女性がマイノリティにならない、女性同士の哲学の交流の場をつくる目的で行われている。しかし「女性」の定義を行わないことで、「女性」の歴史的な意味を理解し戦略的に利用することと、その語の定義やその定義を成り立たせているもの自体を疑い批判することを両立させている。そして、参加者の安全を確保するために、この規定への異議は認めていない。言動についてのルールでも、さまざまな仕方で「女性」である人が参加している点に配慮した発言を参加者にお願いしている。また、プライバシーの保護について、SNS への投稿の制限やジェンダーやセクシャリティ、バックグラウンドなどについてのアウティング等の行為の禁止を定めている。読書会やディスカッションでは、グラウンドルールを以下のように定めている。①さまざまな人がいることを忘れない、②一般論で断定しない、③他の人の話を遮らない、場を占有しない、④話したくないことは話さない、気分が悪くなったら退室自由、⑤プライバシーへの配慮。このグラウンドルールは必要な場面で毎回確認されている。

言葉を大切に使うことも、WOMEN: WOVEN がセーファースペース作りのためにしていることだ。特に、メンバーの安全性を確保するために、折に触れて WOMEN: WOVEN は以下の点を内外に呼びかけている。まず、本人の自認を踏まえることなく、この人は「女性」だから/ではないからという想定のもとで WOMEN: WOVEN を紹介することは、本人の自認と異なる扱いをしてしまう、いわゆるミスジェンダリングにつながりかねないということを注意喚起している。また、紹介の際に「誰々も参加している」など、参加者の情報を引き合いに出すことは、同様の理由からミスジェンダリング・アウティングにつながる可能性があるので避けてほしいとお願いしている。もちろん、参加者の情報を口外することについても同様だ。最後に、こうしたリスクと、メンバーとなりうる人以外にも現状や団体の存在を知ってほしいという思いから、メンバーとなりうる人を予め判断せず「すべての方に WOMEN: WOVEN を知ってもらう」ために、ゼミや授業、研究室での集まりなど多くの人が集まる場で WOMEN: WOVEN の存在やその背景となる問題について話してもらい、参加や支援はそれぞれに委ねてもらいたいとお願いしている。このように、WOMEN: WOVEN の話をするときに留意してほしいことを共有し、WOMEN: WOVEN が話題に上る場面での安全性にも気を配っている。

また、アクセシビリティの観点からのセーファースペース実践も行なっている。できるだけ多くの人が安全に参加しやすいように、活動の場をオンラインにし、匿名での参加も可能にしている。発言は音声でもチャットでも可能だが、もちろん発言をしないで聴く・見るだけの参加も歓迎している。視認性の高いカラーユニバーサルな資料作りを心がけており、字幕機能は現在 Zoom の自動字幕を利用している[3]。

---

3 Zoom の自動字幕機能では不十分であり、この問題は今後の課題としている。

「女性」の中の「多様さ」をできるだけ反映させるために、イベントの登壇者選定にもいくつかの考慮事項を設けている。登壇を依頼するのは博士後期課程以上の「女性」研究者だが、キャリア、地域、出身大学・大学院、専門のバランスが毎回偏りすぎないように心がけている。

報告者が毎回イベントの司会を担当していることから、場の雰囲気作りについての実践と実践上の悩みが共有された。「より多くの人が話しやすい雰囲気をつくるにはどうしたらいいのか？」という悩みを常に持ちながら司会を行なっている報告者は、誰かが場を占有しないようにすること、沈黙が遠慮や焦りを生まないようにすること、無理に話さなくていいということ、のバランスを取るのが難しいと述べた。

この報告は以下の言葉で締めくくられた。「私は司会担当ですが、正直なところ場の作りをするうえでとても負担を感じています。逃げ出してしまいたいとさえ思うときもあります。セーファースペースは決して完成しないからこそ、その試みは常に自分も他人も傷つける不安や恐れと共にあります。場を作る側の人に限らず、その場にいる人全ての人で行っていける実践についてのアイディアをみなさんと話したいです。」

3. 竹内報告「すべての場をセーファーにする：自助グループの内と外から」

竹内は、「すべての場をセーファーにする：自助グループの内と外から」という提題を行った。とりわけマイノリティにとっての「セーファースペース」となることを目指す試みは、WOMEN: WOVEN を含め、さまざまな形で広がりつつある。しかし、多くの場合マイノリティ自身によって運営される、限られた「避難所」があれば問題が解決するわけではなく、学会や研究室、読書会などの場もまた「セーファー」となることが望まれる。本発表では、今回の参加者の多くが、立場の強くない若手であることに留意しつつ、より多様な場を「セーファー」にするための条件を、WOMEN: WOVEN の活動を通じて見出されたニーズや現状の問題、運営上の工夫などにもとづいて考察した。

今回の発表では、WOMEN: WOVEN を一つの「自助グループ（セルフヘルプ・グループ）」の活動として捉えることを試みた。自助グループとは、何らかの障害・困難や問題、悩みを抱えた人が、同様な問題を抱えている人々とともに、当事者同士の自発的なつながりで結びついた集団のことであり、専門家の手に依らず、あくまで当事者主体の運営を行う点に特徴がある。今回この観点から分析を行ったのは、主に二つの理由による。まず、WOMEN: WOVEN を含む多くのセーファースペースが、実際にこうした当事者主体のグループであり、それによるメリット・デメリットの双方があるということ。次に、さまざまなニーズや困難に応じた自助的コミュニティの一例として WOMEN: WOVEN の活動を捉え直し、運営上のノウハウや困難について発信したいと考えたためである。

はじめに、自助グループとしての WOMEN: WOVEN に参加して良かったことを、参加者・オーガナイザーとしての私の経験からまとめた。私の場合は、所属する研究室などでは属性（揺

らぎを抱えつつシス女性であり、パンセクシュアルであり、あまり体力がなく…）を共有する人は０～１割程度に止まっていたため、同じような経験や困難を持つ人とつながり、近い視点を共有できることがまず貴重であった。また、他の場所では「セーファースペース」をそれ自体として目指そうとなったことがなかったが、WOMEN: WOVEN の運営や参加者間では、「セーフでない」状況を経験した人も多く、その必要性を「弁明」する必要なしに共有することができた。「セーファー」であることを目指して、使う言葉や、運営の仕方を継続的に変容させていく中で、自分とは異なるマイノリティの属性を持つ人にとっての居心地の悪さとはどのようなものかについても関心が生じ、「女性」の自助グループといえど、そのニーズは一枚岩ではないこともわかってきた。

次に、自助グループとしての WOMEN: WOVEN の課題についてである。課題の一つは、WOMEN: WOVEN が特にパンデミック下で形成されてきた団体であり、Slack、Zoom などオンラインでの交流を主体とすることと大きく関わる。オンラインツールは、地域・大学間やアカデミア内外の機会の差などの解消には非常に有効であり、多様な地域からの参加者や、学部生・院生・社会人などさまざまな人と交流可能になった。一方で、時間的にも空間的にも関係が途切れがちで、時間をかけて信頼を育んでいくことが難しい。こうした性格は、ある程度の継続的な信頼関係を基盤とする自助グループのニーズとは合わない。また現状、オーガナイザーが活動の場のほとんどをセッティングするようになっているが、運営と参加者の関係が、「コンテンツの提供者と受け手」のようになることは、本来の互助的な性格に照らせば望ましいことではない。WOMEN: WOVEN ではオーガナイザー職を有償化し、継続的に運営に関わることの負担は考慮しているため、それに応じた仕事をするのは当然のことではあるが、三名の運営で全てのニーズに応えることは難しい。読書会や卒論・修論・博論の執筆仲間募集など、それぞれのニーズに合う形で、Slack などをもっと活用いただけたら嬉しい。

また、大前提として、「避難所」としてのセーファースペースが求められる背景には、哲学界におけるジェンダーの構造的な不均衡と、それに伴って生み出されている、大学や学会、読書会などさまざまな場での「居場所のなさ」、あるいはより現実的な排除が存在する。そうした中で、セーファースペースを必要としている人ほど時間的・経済的・心身のリソースは圧迫されていることが多く、問題の解決が「自助」頼りになることには限界があるということも認識されておかなければならない。このような事情は、MAP UK による「セーファースペース・ポリシー」の中で、なぜこうしたポリシーが必要かを説明する箇所によく示されていると思われるので、引用しておく。

> こうしたポリシーは、それを最も必要とする人たちがつくることになりがちで（だって、他にだれがやろうとしてくれる？）、だからたいていは最も周縁化された大学院生によって書かれるのだが、そうした人たちは最も時間がないことが多い。もしあなたがすでにいくつかの平等や多様性に関する委員を務めていて、収入のために副業をしていて、障害と

もつきあっていっているのだとしたら、会議で自分のような人がセーファーに過ごせるポリシーを書くところまで手を回す十分な時間なんて、大抵ないだろう。[4]

「自助グループ」の困難の一つは、マイノリティ自身の被る問題について、その解決の主体となることを多くの人から望まれることである。しかし本来、自助グループは、あくまで自分たちで自分たちを助けるための活動であり、同じような人々を代弁し、構造的な問題の解決に動いたり、全ての個別的な問題に対処してくれたりするヒーローではない。むしろそれを運営しているのは、やや疲れている、若手の、しばしば障害のような他の困難ともつきあっている人たちであることが多い。

そもそも問題を被る当事者だけが、問題の解決に当たるべきなのだろうか？むしろ、そこに参加する人が苦を感じる状況を作り出すことに関わるすべての人が本当のところ「問題の当事者」ではないのだろうか？このような観点のもと、今回の発表では「公共性の高い場におけるセーフティの確保」と「多様な自助グループの形成」という二つの方向で、より多くの人を巻き込んだセーファースペース形成の可能性を探った。

(1) 公共性の高い場におけるセーフティの確保

公共性の高い場所とは、ここでは大学、学会など、異なった意見・価値観を持った人々の、自由な活動や対話によって成立する場を想定している。これらの場は、自助グループが一定の「閉じた」共同体であるのとは対照的に、誰にでも開かれていることが重要であるという点に違いがある。しかし、それによって参加者にとっての「セーフティ」が問題とならなくなるわけではない。むしろ、ある人々にとってはそこに著しく参加しづらい場合、開かれた言論の場にはなり得ないという意味で、安心してそこにいられる、発言できるというセーフティの感覚は、公共的な言論の空間を構成するための必須条件であるとさえ言える。

しかし大学や学会などの構成員は、身をもって「セーフでない」状況を経験した人ばかりではない。多くの場合、主催する人々はすでに地位や経済面等、さまざまな面で安定している人であるために、その会全体でセーフティを確保する必要そのものが理解されにくいこともある。こうした人々も巻き込んで「セーファー」なスペースを目指す際には、一定のルール・ポリシー作りは一つの有効な手段であると思われる。

ここで、WOMEN: WOVEN のルール運用について紹介した。WOMEN: WOVEN では、Slack への登録前に読んでもらう「Slack 使用上のガイドライン」と、イベント・読書会の「グラウンドルール」を設けている。例えば、「すでに参加資格のある人に対し、その参加資格の有無や、資格のボーダーラインについて、改めて問題とする書き込みは受け入れない。」といった規定が存在し[5]、これに照らせば、「～な人は〈女性〉には含まれないのではないか？」という書き

4 Safer Spaces: Why, What and How. On the Blog of Minorities and Philosophy (MAP) UK. より（小川泰治ら訳）。

5 WOMEN: WOVEN HP 内「WOMEN: WOVEN Slack 使用上のガイドライン」

込みをすることは違反に当たる。これは、すでに資格を明記されたセーファースペースへのアクセスを、一部の人についてのみ、しかもその存在の根本に関わる点について「問題化」すること自体、メンバーの心理的安全性を著しく脅かしうると考えるためである。「哲学」をする場である以上、何でも自由に議論されるのが理想ではあるが、「対等に論じられることがあり得ず、議論の場そのものを成り立たせなくなる問題」と思われるものについては規定を設けている。オーガナイザーは、書き込みの削除を要請したり、特に悪意のある介入などが見受けられる際には、メンバーを退出・除名したりする権限を持つ。こうした措置は最低限に抑えるべきであるし、実際にこうした強制的措置をとったことはないが、WOMEN: WOVEN のルールには、メンバー全員に課される一定の強制性がある。

こうしたルールやガイドラインが存在することのメリットとして、事前に「何が問題であるのか」「実際起きたらどうするか」を明確にし、合意を形成しておくことで、少しでも当事者に問題を押し付けることなく対応できる、ということがある。実際に問題となるような事態が起きてからでは、それがどのような点で問題なのか、誰が、どのような対応を、どのような手続きですべきか、十分にメンバー間で検討し、合意を取ることはできない。そうした状況下では被害者の泣き寝入りになることが多く、それは第一に避けるべき事態である。しかし、ルールに雁字搦めになったり、過度の自己検閲に陥ったりして全く話せなくなることや、オーガナイザーが議論を一方的に「管理」する立場になることは望ましくない。ルールを実際に運用していく上では、ルール自体もメンバー間のコミュニケーションの中で変えられるようにしておくこと（フィードバックの機会やツールの設置）、そもそもどういう場を実現したいのかといった根本的なモチベーションが共有されていること、メンバー相互、スペースへの信頼感の醸成なども同時に必要である。

こうしたルールに関する実践を、公共空間においてセーフティが著しく危機に晒される、ハラスメントなどの事例にどのように適用できるかを考察した。そもそもいまだに「ハラスメントやストーカー事案などは個人間で解決すべき問題であり、学会で対処する必要はない」と公言して憚らない教員が一定数いる。だが、力関係の不均等な当事者間に解決が託された場合、構造的に立場の弱い会員が活動を縮小するよう強いられることがほとんどであり、実際に両者の間を調停できる中間的団体は大学や学会しかないことも多いのである。ゆえに、構成員間の不正は、公的な、大学や学会全体の問題と捉えられるべきであり、適切なガイドラインを制定することは、そこに参加する人にとってより「セーフ」な、開かれた学術活動の場を目指すにあたっての必須要件となる。ハラスメントをめぐる議論では、「加害者の権利か被害者の権利か」「キャンセルか否か」のような、主に当事者間の二者択一に持ち込まれやすい。しかしその間に、どういった行為がどのように問題であり、誰による、どの程度の、どのような手続きによる調停や制裁が妥当で、被害者の救済には何が必要かなど、具体的に考えるべき広大な領

---

https://docs.google.com/document/d/1Ee8UMuTTcCJOc3eJ96O8NpmFzezwb2r3pVEEBJwerIA/edit?tab=t.0#heading=h.vgpgnu8pzm2c

域があるはずである。むしろ、そうした領域に対応する法や制度の不備、無関心による議論の蓄積の少なさが、二者択一の背景にあるより根本的な問題ではないか。

こうした現状に対して、必ずしも立場の強くない若手には何ができるのだろうか。まずは現状を知り、継続的に関心を持ち、必要な情報をシェアしておくことだろう。相談を受けたり身近で被害を見聞きしたりした時には、プライバシーに配慮しつつ、適切な機関につないでサポートする方法がわかっているとよく、また何がハラスメントやストーキングの行為や、二次加害など、相手のセーフティを損なう行為になりうるのかを知っておくことも重要である。そうした情報に関して「学術環境研究会」の HP が参考になる[6]。法律や学会でのガイドラインの策定は、必要だが時間や労力がかかるものであり、若手が動くのは難しい面もあるが、周囲の十分な協力が得られるならば、有志で学会に対して要望を出すことなども可能である。

(2) 多様な自助グループの形成

次に、多様な自助的コミュニティの形成についてである。「開かれた」場たることを謳う学会などの場も、実際には哲学をするすべての人にとって自由な議論の場になり得ているわけではない。分野ごとに学会組織があったりなかったり、新しい試みに対して門戸が開かれておらず、査読や評価の面で不平等が生じていたり、大学での訓練を前提としていたりと、参入や活動のしやすさには差異が生じている。これらの問題は、上で述べたように公的な組織が変わるべきものでもあるが、同じような関心やニーズを抱く者同士で自助的なコミュニティを形成することは、一つの生存戦略となりうる。自助的なコミュニティのメリットとしては、①学会などでは掬い取れないテーマや分野についても、アカデミアとの距離にかかわらず、勉強や議論を活発に行うことができる、②個々人が多くの人との議論に開いていく前に、その参入の下支えとなるような自信や技術、セーフティの感覚を養うことができる、といった点を挙げることができる。

こうした自助的な取り組みとしては、この若手フォーラムをはじめ、勉強会や読書会、哲学（対話）カフェ、オンラインコミュニティなど、さまざまな形の実践がすでに存在する。これら一つ一つの場が、全ての人の全てのニーズをカバーしてくれることはない。おそらく理想的なのは、それぞれにとって、さまざまな意味で「セーフであること」を追求することのできる、少しずつ性質の異なった複数のセーファースペースが存在するような状況ではないか。例えば、この話は大学で属している A ではしづらいけど、B の場ならできる。でも別のこういう部分についての話を安心して共有できるのは A だ…というような具合で。

もともとセーファースペースの理念は、ジェンダー、セクシュアリティ、障害、人種、国籍、階級、年齢、能力などにおいて「マイノリティ」である人々にとって安心できる場所となるこ

6 学術環境研究会には、「大学で安全に学び続けるためのハラスメント対応知識：女性の活動を通じて」という題で 2023 年 6 月に WOMEN: WOVEN 内で講演していただいたことがある。HP のアドレスは参考文献表に示した。

とを目指して生まれてきた理念である。こうした人びとのニーズは多くの場では後回しにされがちであるので、そういった人びとのため（だけ）の避難所であることを掲げる場の必要性が失われることはないだろうし、見失われるべきでもない。とはいえ、自分と他の人にとってその場が「セーファー」になることを目指し、困難ながら少しずつ変容していく実践とその場所は、「私はマイノリティではない」とか、こうした実践に「自分はお呼びではない」と思っている人にこそ必要ではないかとも思われる。それは、加害的・攻撃的な言動や、過度に親密な関係を求め、他者のセーフティを危機に晒してしまう行動の背後には、その人の「不安」や「ケアの不足」があることも多いように見受けられるからだ。例えば初期キャリア研究者であれば、ほとんど例外なく、業績主義・能力主義の圧力や、経済的な不安定さなどに晒されることになるが、その内で自分たちを自ら助けていくだけの方法を、私たちはどれほど備えることができているだろうか。私は、あなたがあなたを助けることにもっと本気になって欲しいと思っている。そのための技法を身につけ、変容してゆく実践を、自分一人の力でやるのではなく、同じ困難を抱える人との継続的な関係の中で、居場所を持ちつつ変わることができることは、自助グループの良さの一つだと思われる。

最後にまとめておこう。まず私たち若手がやっていけたらよいと思うのは、自分の属している場所やコミュニティを、少しでも「セーファー」にするよう思考し、実践することだ。さらに余力のある人は、WOMEN: WOVEN や若手フォーラムなどの自助的な活動や、セーファースペース形成のための活動にも参加してもらえたらとても嬉しい。というのもこうした活動は、慢性的に人手不足に陥っており、一つの団体で運営をやっていたメンバーが他の団体も兼任している…という状態にしょっちゅう出くわすからだ。こういった場所に必要性を感じる、今回実に 84 の発表枠の方々には、ぜひ運営の方に携わることも考えてほしい。

ただそもそも人手不足の背景には、研究とセーファースペースやコミュニティの運営が別立てで、後者は自分の業績にはならないという事情があると思われる。しかし、セーフな空間やコミュニティなしには自由で活発な哲学の議論などあり得ないのだから、より長期的には、こうした活動も「哲学」の一部と捉えられ、その意義が認められていってほしいと思う。もちろん、時間的・経済的・心身のリソースが手いっぱいな中で、誰もがいつでも、そういう活動に力を投じることができるとは限らない。だから活動の多寡は、道義的な指標に還元されるべきではない。最後に確認したいのは、「セーファースペース」が目指すのは、最終的には構造や制度の変革という点ではなく、「ここにいるわたしとあなたが、安心してここにいられること」に他ならないのだということ、その一点こそが望まれているということだ。

4. 浅葱報告「マイノリティの言葉を歪めないために」

浅葱は、「マイノリティの言葉を歪めないために」という提題を行った。WOMEN: WOVEN での活動を通して得られた考えから、自身の経験も織り交ぜながら「マイノリティであるとは

どのような状態か」、「自分と異なる立場である他者の想像」、「他者の言葉を歪めないために何が必要か」について発表した。まず私の報告の前提として、学会やゼミ等のアカデミックな場での交流というより日常的な場面、たとえば友人と食事にいった際に交わされるようなやり取りに基づいている事をご了承いただきたい。本報告の内容には差別的な内容も含まれる点も先に注意喚起し、扱うのは複数人が集まる場に限らず、一対一の二者関係も含まれることも説明した。

はじめに、WOMEN: WOVEN に加入した経緯とそこから得られた「マイノリティであるとはどのような状態か」を記してみる。学部 4 年時に自閉スペクトラム症が発覚し、それまで全く自覚もなかったためショックで精神の調子を崩し先行きも不透明なまま卒業した中、母校哲学科の SNS から WOMEN: WOVEN の存在を知った。とにかく自宅以外の居場所を確保すること、それが当時の最優先事項だったと振り返る。

自分の障害をカミングアウトすると同時に加入し、読書会等に参加しての WOMEN: WOVEN の印象は「自分の属性が凪のように穏やか」であり、半ば拍子抜けした記憶がある。というのも、文脈は失念してしまったが当時のメンバーが神経多様性の観点から、ASD から Disorder の D を取った“AS”という表現を用いてくれたことがあったからだ。自分自身、精神障害という自己認識を検査・診断を経て獲得してきたし、現在こそさまざまな福祉を頼りながら就労し一度は失った自尊心を取り戻しているものの、大学在学時にはカミングアウトした相手から差別的な言動を受けることも少なくなかった。そのためより Disorder という文脈に自分を置くことを自明視する節があったように思う。

ここで強調したいのは、カミングアウトしてきた哲学に携わる相手の中でも差別的言動を向けてきたのは、主に哲学アカデミアにおける多数派に属する人々であったということだ。大変大雑把な物言いになるが、哲学という普遍性を求める（より多くを包摂すること）営みに、つまり既存の定義を攪乱し続ける営みに身を置きながら自身の差別的な意識に敏感でないような人がいること、あるいは敏感でなくなってしまうような構造があることに少々驚く。世間一般において「優秀」とみなされる人々は一見多様な人々と関わっているようにみえて、他の面に焦点を当てれば同質性の高い集団の中で過ごしているのかもしれない。

さて、WOMEN: WOVEN のグラウンドルールを一部参照すると、「マイノリティという状態」についてみえてくる。本団体では「話を遮らない」、「さまざまな人がいることを忘れない」というルールを遵守した上で「自由に話すことができる」。裏を返せばある人にとって自身の言葉が誰かに遮られたり、他の人から承認されない、承認されないだろうと思い込ませているような環境があることを示している。自分が編み出した言葉が相手から承認されるか否かは、自分の存在がこの場で想定されているという根本的な安全性を左右する。そう考えると、マイノリティであるとはその数が少ないことに限らず、自身の言葉が社会において主流なコードとして流通していないこと、反対にマジョリティとは自身の言葉が十分に社会に流通しているという両者の非対称性が現れる。実際、そのために「証言的不正義」「解釈的不正義」といった

概念とともにマイノリティの言語資源の少なさを是正しようとする動きが登場したのだった。

続いて、マイノリティという状態をより少なくするための「自分と異なる他者の想像」について報告する。これについて魔法のような解決法を論じることはできないが、調整するべきだと思う点について述べたい。あるマイノリティ性や困難を抱える人々に、直接その困難の詳細を聞き求めることそれ自体が精神的・身体的安全性を損なわせているという点だ。これは他の WOMEN: WOVEN オーガナイザーの言葉からヒントを得た。困難を抱える人々は既に自身の立場を言語化し、それを是正するよう他者に伝える努力を強いられ続けている。全ての人の実存は平等に「ただそこにいる」のであり、本人の自発的な意志が確認できない限りは学校教材のように扱われることはあってはならないと思う。当事者の語りを中心に収録された書籍に触れてみるなど、相手と直接交流する前にある程度の知識を身につけることは可能だ。もちろん、その知識に従って相手を杓子定規的に理解しようとするのではなく、相手のさまざまなアイデンティティを総括的に捉え、ある側面が本人の中でどのような位置付けにあるかを読み取ろうとすれば、社会的に同じ名称で共有されている一つのアイデンティティにも幅があることをも実感できると思う。

だがそれでも、現実では時に自分たちが身につけた知識を打ちのめしてしまうような他者と出会うことはある。自らの経験から差別的な考えを内面化する場合や、より包摂的な言葉にアクセスできる経済的・時間的な条件が整っていなかったり、否定的に自身を捉えることを正しいと思わされているような他者だ。これは本人から許諾を受けて記すが、長い付き合いである私の友人はある時不条理に遭った末に病に倒れ、病状がある程度回復したのちも病と付き合いながら、私の ASD が発覚した際には「障害へのレッテルに慣れてはならない」と心理的ケアに努めてくれた。にもかかわらず、彼が自身について話す時に「障害者は子供を持つべきではない」「自分には責任能力が無い」と言い放ったことがある。それは文字通りに捉えるものというより彼なりの自身の苦境を表現した言葉であるが、聞いた時には私自身も傷ついた。何より、「今までの関係で得たものや自分の経験、知識、人格を丸ごとコミットしても彼にとっての安全な場所を作ることができないのではないか」という心情に陥った記憶がある。彼には病だけでなく他のマイノリティ性を複数背負わされていたし、むしろそちらの方が彼の中の安全性にアクセスする条件を阻んでいた。

WOMEN: WOVEN のグラウンドルールに従えば（従わずとも）、彼の発言には非難されるべき部分を多分に含んでいる。しかしそれが彼の環境・生い立ちによって制限された言語リソースから生み出された言葉であるならば、正面を切って非難することも難しいように思われる。WOMEN: WOVEN はアカデミアとどのような距離を取るかにかかわらずより多様な人々を包摂することを目指していて、哲学という団体の主旨と自助グループであることを鑑みればいたしかたなさもあるが、比較的高水準の教育や言語能力を有するという点においてはまだ偏りがあると活動を通して感じている。セーファースペースとケアの試み、そしてより包摂的な言説は提供する側の経済的・時間的・感情的リソースを割いているという意味で無料ではないが、経

済力や人間関係、教育に恵まれた一部の人々だけが手に入れられるような高級品であってもならない。それとも、私の友人のような人々は時代のアップデートについていけない者たちとして片付けられてしまうのだろうか。それこそ相手の安全を、相手にとってこの世界がどのように見えているかを想像できていないのではないだろうか？相手の言葉を個人的なものに留めてしまわないか。セーファースペースの運営に携わる人、身近な人と関わり続けようとする人にもぜひ考えていただきたい。

本報告では実際に自分や周囲の人が受けてきた傷を用いてきた。マイノリティの語りには必ずしも綺麗とは言えない言葉遣いで表されるものがあり、それらから目を逸らさず解釈を控え、ただそのものとして受け止める胆力が相手の言葉を歪めないために必要だと考えるからだ。だが正直に言うと、この考えを見聞きした人を脅かしてはいないか、これまでの WOMEN: WOVEN の運営に携わってきた方々の顔に泥を塗っていやしないか少なくない懸念がある。発表時の報告はこのように締めくくられた。

最後に、7 月の発表時には含まれなかった議論を紹介することでこの報告を終わることにする。つまり、セーファーであるよう自分がコミットしてきた場で、相手が自分に攻撃的な態度を向け、そのような言動を繰り返してきたらどう対処できるか？という問いだ。というのも、発表からしばらくした後、先述の私の友人からそのような態度を取られ、結果的に袂を分つという結末を迎えたからだ。

これについての詳細は割愛するが、「ああまたか」と思わされる「自分の属性が波を打つ」ような経験であった。セーファースペースを運営する上で覚悟する必要があるのは、自分がコミットしてきたことに対して相手がどのような評価を下すかは相手次第で、どうしようもないということだ。もし WOMEN: WOVEN に加入しないままの状態で同じ結末を迎えていたら、元々心の広くない私は「こんなに気を遣って関わっていたのに」と愚痴の一つでも零していたことだろう。しかし今、不思議と怨嗟や後悔のような感情は抱いていない。WOMEN: WOVEN が目指す「全ての人がセーファーであるように」という理念が私自身の活動を通して、自分にとっても当たり前のものとして心身に浸透してくれたからだ。その上で長年にわたり人間一人が持つ複雑さを学ばせてくれた友人には感謝している。引き続き、あなたと WOMEN: WOVEN を通して得た力で誰かにとってのセーファースペースを目指します。

5. 結び

3 つの報告後、オーガナイザーから投げかけた問いなどをもとに、3 グループに分かれて対話を行った。ディスカッションの中では、次のような応答があった。

まず、セーファースペースをめざして設けられたグラウンドルールが一部のメンバーによって遵守されず、運営に携わる人にさまざまな皺寄せが及ぶ具体的な事例が紹介され、哲学する場における安全性の意義がその実効性を発揮できる程度にまで浸透していない現状があること

が共有された。これを踏まえ、人々が集まる場にグラウンドルールを設け、守っていく重要性が強調された。ただし実際にルールを設ける際は、運営を担う人々がメンバーに課すという関係性に限らず、メンバーの立場や要望を汲みとり、運営のあり方を適宜変容していけるような柔軟さが求められる点も言及された。

次に、それぞれが何かの場に参加するとき/しないときにどのような理由で決めているかという話や、そこからハラスメント規定の存在など、セーファーな場になるような試みがなされていることがわかることが安心感に繋がるという意見などが出た。ルールや規定について、小規模で個人的な読書会などはメンバー同士があらかじめ知り合いであることが多くルールは不要である場合も多いことが指摘され、そのような小規模な場の安全性確保のためにできることについてさらに考えていく必要があることも示唆された。

予定していたスライド発表や、Zoom の字幕機能を使用したリアルタイムでの文字起こし表示などが、設備の機材トラブルにより実施できないなどの波乱もあったが、午前中の枠ながら多くの方に参加いただき、充実したワークショップとなったと思う。当日、さまざまな面でサポートいただいた若手フォーラム運営の方々、ご参加いただいた方々、またご支援いただいている皆様に、改めて感謝申し上げる。

参考文献

・堅田香緒里 (2021)『生きるためのフェミニズム: パンとバラと反資本主義』タバブックス.

・学術環境研究会ホームページ（https://sites.google.com/view/academic-environment/home, 2024 年 11 月 30 日閲覧.）

・WOMEN: WOVEN ホームページ（https://women-woven.philosophyonline.net/, 2025 年 1 月 18 日閲覧）

・WOMEN: WOVEN Slack 利用上のガイドライン（https://docs.google.com/document/d/1Ee8UMuTTcCJOc3eJ96O8NpmFzezwb2r3pVEEBJwerIA/edit?tab=t.0#heading=h.vgpgnu8pzm2c, 2025 年 1 月 18 日閲覧）

・Klieber. A. and Vince. R. (2021). Safer Spaces: Why, What and How. On the Blog of Minorities and Philosophy (MAP) UK.（小川泰治ら訳, https://docs.google.com/document/d/e/2PACX-1vTrl2SQ5GrMxTmZgR3qMA6Pcp11onJgqb6j-4xqEh0g2_nFRnx-c_jgRtPsOycWGG-MsYIcXh-WFNZx/pub, 2024 年 11 月 30 日閲覧.）